井流ヲ傳受シタル人語ラル、

〔春雨樓叢書〕瘧

瘧をおこりと云は、時におこり、時に止むの俗語也、源氏若紫の卷には、わらはやみと云、もろこしにても、奴婢病と云、いやしき病なれば、大人は煩はぬ意也、續博物志に見えたり、又瘧を愈す藥を截藥といへるは、邪氣と正氣と出逢ふ道を、立切ると云意なるべし、

〔叢桂亭醫事小言〕支體浮腫

一商人患疫、二三度下シテ愈ト云ヘドモ、餘邪二三度聚りて再復ス、後ニ戰汗シテ愈タレドモ、微邪ノコリテ餘熱サツハリトセズ、又紫胡加大黃ニテ漸ク治シタレドモ、日數延引シテケリ、食モナルニ至リテ、通身浮腫ス、他ニ苦ムコトナシ、身無微熱、行步ニ力ノナキノミナリ、桂枝加芩朮湯ヲ與ヘ、二三日ニテ腫消シ、平復ス、

〔橘黃年譜下〕淺草司天臺伊藤鐵五郎、年三十、身發黃水氣アリ、煩渴甚シ、余茵蔯五苓散加黃連ヲ與ヘ、三聖丸ヲ兼用ス、數日ニシテ發黃消シ、水氣全ク去ル、

〔醫學天正記乾下〕黃疸

慶長二七ノ五

一岡山中納言秀秋公、十八九歲酒疸一身黃、心下堅滿而痛、不飲食、渴甚、清心湯全當歸白朮散朮苓各三匁半二匁半西杏各二匁斤苓茵各一匁甘入姜、九日黃色少減、心中悸動、心遠脈遲、用養榮湯而効、

〔醫學天正記乾上〕中風

天正十一年正月二日

一正親町院、俄中風、全不識人事、痰涎鋸聲、身溫、御脈浮緩、竹田定加法印傷寒申、半井通仙中風申、二